

〈幼稚園 健康〉

進んで体を動かすことを楽しむ幼児の育成

—多様な動きのある運動遊びと環境構成の工夫を通して—



浦添市立 沢岬幼稚園

前田 一美



目次

I	テーマ設定理由	1
II	目指す幼児像	1
III	研究の目標	2
IV	研究仮説	2
1	基本仮説	2
2	作業仮説	2
V	研究構想図	2
VI	研究内容	3
1	幼児期における運動能力の発達	3
2	幼児期の運動の意義	4
3	運動遊びにおける環境構成や援助の工夫	5
4	多様な動きが経験できる運動遊び	6
5	運動遊びの指導のポイント	6
6	運動遊びで育つ力	8
VII	保育実践	9
1	題材名	9
2	ねらい	9
3	題材について	9
4	検証保育の全体計画	9
5	本時までの遊びの様子	10
6	本時の保育	13
7	本時後の遊びの様子	16
VIII	研究の考察	17
1	作業仮説（1）の検証	17
2	作業仮説（2）の検証	19
3	本研究を通して	21
IX	研究の成果と課題	21
1	成果	21
2	課題	22
	おわりに	22
	主な参考・引用文献	22



進んで体を動かすことを楽しむ幼児の育成

— 多様な動きのある運動遊びと環境構成の工夫を通して —

浦添市立沢岬幼稚園 前田 一美

【要 約】

本研究は、様々な運動遊びを通して体を動かす楽しさや心地よさを味わい、進んで体を動かして遊ぶ幼児の育成を目指し、体を動かしたくなるような環境構成や、個の発達に応じた援助の工夫を試みるものである。

キーワード □運動遊び □環境構成 □個の発達に応じた援助

I テーマ設定理由

現代の社会は、生活が豊かで便利になり、都市化や少子化が進展したことで、社会環境や生活様式を大きく変化させ、子どもの遊ぶ場所や仲間、時間の減少、交通事故や犯罪への懸念などが体を動かして遊ぶ機会の減少を招いている。このような社会の変化は、幼児期の多様な動きの獲得や、体力・運動能力にも影響を与え、意欲の減弱やコミュニケーションがうまくとれないなど、子どもの心身の発達に重大な影響を及ぼすことが懸念されている。

幼児期は運動機能が急速に発達する時期で、その時期に多様な運動刺激を与えることで、タイミングよく動いたり、力加減をコントロールしたり、とっさに身を守る動きを身につけたりするなど、体の動きを調整する能力が高まり、生活に必要な動きや将来的にスポーツに結びつく動きなど、基本的な動きを多様に身につけやすくなる。

幼稚園教育要領「健康」のねらいには、「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」と示され、自ら体を十分に動かそうとする意欲や、進んで運動しようとする態度を育て、身体諸機能の調和的な発達を促す重要性が述べられている。

幼児期の運動は、幼児一人一人の興味や生活経験に応じて、幼児自らが体を動かす楽しさや心地よさを実感することが大切である。また、様々な遊びを通して多様な動きを身につけていくことも重要である。

幼児期に体を動かして元気に遊ぶことは、身体的にも精神的にも健康の維持増進につな

がると考える。

本学級の幼児の実態は、体を動かすことが好きで木登りや鉄棒、鬼ごっこやリズム遊びなどを楽しむ幼児も見られる。しかし中には、朝から眠さやだるさを訴えたり、ボーっとしたり、体力が続かずすぐ「疲れた」と訴えたりする幼児が見られる。また、経験不足から手・足・指の力加減が苦手で動きがぎこちなかったり、運動が苦手で、自分からは運動遊びに全く取り組もうとしなかったり、やる前から「できない」と、初めてのことに對して消極的な幼児も見られる。

自身のこれまでの保育をふり返ると、運動遊びを取り入れてはいるが、取り組む期間や運動遊びの遊具を限定してしまうなど、進んで体を動かして遊びたくなるような環境構成の工夫が不十分だったように思う。

そこで、日々の保育の中で幼児が日常的に運動遊びを楽しんだり挑戦したり、思わず体を動かして遊びたくなるような環境構成や、多様な動きを経験できる運動遊びを工夫する。さらに個の発達に応じた声かけや援助を行うことで、幼児が自ら体を動かして遊ぼうとする意欲が育ち、体を動かす楽しさや心地よさを味わうようになり、進んで体を動かすことを楽しむ幼児が育つのではないかと考え、このテーマを設定した。

II 目指す幼児像

様々な運動遊びを通して、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、進んで体を動かして遊ぶ幼児

III 研究の目標

進んで体を動かして遊ぶ幼児の育成を目指し、体を動かしたくなるような環境構成や個の発達に応じた援助の工夫を図る。

IV 研究仮説

1 基本仮説

園生活の遊びの中で、幼児が体を動かしたくなるような環境構成を工夫し、個の発達に応じた援助を行うことで、楽しみながら運動遊びに取り組み、充実感や満足感を味わい、

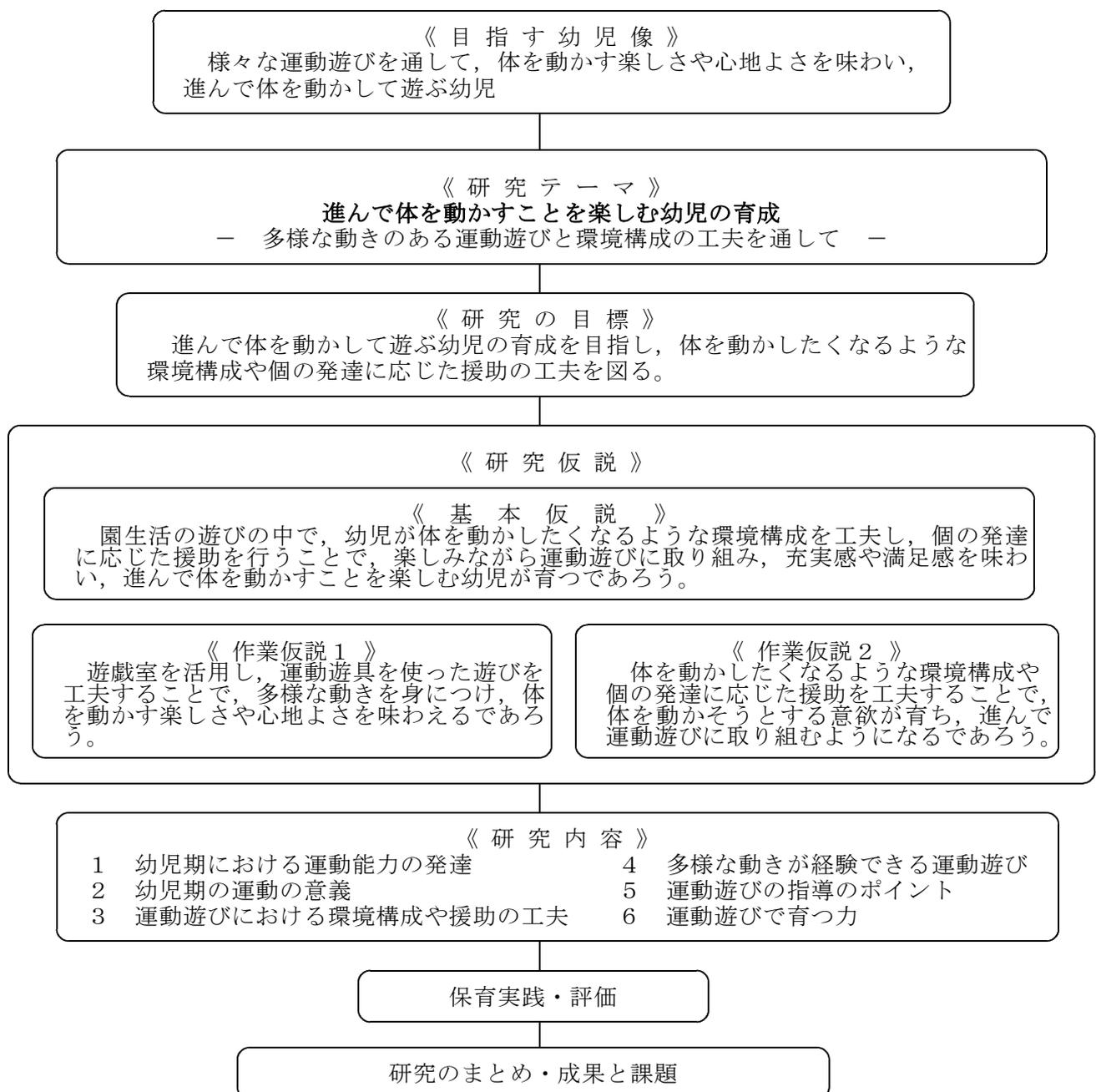
進んで体を動かすことを楽しむ幼児が育つであろう。

2 作業仮説

(1) 遊戯室を活用し、運動遊具を使った遊びを工夫することで、多様な動きを身につけ、体を動かす楽しさや心地よさを味わえるであろう。

(2) 体を動かしたくなるような環境構成や個の発達に応じた援助を工夫することで、体を動かそうとする意欲が育ち、進んで運動遊びに取り組むようになるであろう。

V 研究構想図



VI 研究内容

幼児期運動指針ガイドブック(2012)を参考に研究内容1～4の項目をまとめた。

1 幼児期における運動能力の発達

幼児期は、人間の生涯にわたって様々な場面において必要な基本的な動き(表1)を幅広く獲得する大切な時期である。この時期には、日常生活や遊びの中で、いろいろな動きを経験することで、基本的な動きのレパートリーやバリエーションが拡大していく(動きの多様化)。さらに、その獲得した動きを繰り返し行うことで、無駄な動きや過剰な動きが減少し、動きが上手になっていく(動きの洗練化)。

表1 幼児期に経験する基本的な動きの例

体のバランスをとる動き	・立つ ・座る ・寝転ぶ ・起きる ・回る ・転がる ・渡る ・ぶら下がる
体を移動する動き	・歩く ・走る ・はねる ・跳ぶ ・登る ・下りる ・這う ・よける ・すべる
用具などを操作する動き	・持つ ・運ぶ ・投げる ・捕る ・転がす ・蹴る ・積む ・掘る ・押す ・引く ・こぐ

『幼児期運動指針ガイドブック』文部科学省 2012

次に、幼児期の発達段階での一般的な運動の発達の特性と、その時期に経験しておきたい遊びの例についてまとめた。

(1) 3歳～4歳ごろ

基本的な動きが未熟な初期段階から、園生活や家庭での環境に適応しながら、「体のバランスをとる動き」「体を移動させる動き」「用具などを操作する動き」といった多様な動きが一通りできるようになる。心身の発達とともに、自分の体の動きをコントロールするようになり、より巧みな動きを獲得するようになっていく。

この時期は入園前で、運動遊びの経験は、保育園に通っているか、家庭保育かということもあるが、保護者の影響が大きいように感じる。

(遊びの例)

全身を使って遊べる、滑り台、ブランコ、鉄棒、巧技台、マットなどの遊具を活用した動きを経験しておくことが望まれる。

(2) 4歳～5歳ごろ

友達と一緒に運動する楽しさを見だし、環境とのかかわり方や、遊び方を工夫しながら、多くの基本的な動きを経験するようになる。特に全身のバランスをとる能力が発達し、身近にある用具を使って操作する動きも上手になってくる。

この時期は、幼稚園の年中児にあたり、ほとんどの幼児が家庭保育からくるので、運動遊び以外にも様々な経験が少ない幼児が多い。園での体を動かす遊びを通して、一緒にやってみたり、楽しさを共感したりして、気の合う仲間ができてくる。体を使った遊びを発展させ、自分たちでルールや決まりを作るおもしろさが増えてきたり、また、年長児の遊びの様子に触れ、真似をしたり、一緒に挑戦したりする姿も見られるようになる。

(遊びの例)

縄跳びやボール遊びなど、体全体でリズムを取ったり、用具を巧みに操作したりコントロールさせたりする「用具などを操作する動き」を経験しておくことが望まれる。

(3) 5歳～6歳ごろ

これまでの経験をもとに、無駄な動きや過剰な動きが少なくなり、さらに複数の動きを中断することなく連続的に行ったり、優しい複数の動きを同時に行ったりと、基本的な動きの組み合わせができるようになってくる。

この時期は年長児にあたり、好きな遊びを見つけ、友達同士誘い合って、自分たちで遊びを進めていくようになる。これまでの経験から、遊びを考えたり、ルールを相談して決めたり、秘密基地などを作って危険な遊び方を楽しむようにもなる。

(遊びの例)

基本的な動きが、より滑らかに遂行できるようになることが期待されるので、遊具を用いた複雑な動きが含まれる遊びや、様々なルールでの鬼遊びなどを経験しておくことが望まれる。

2 幼児期の運動の意義

幼児期における遊びの現状は、活発に体を動かす遊びや、体を動かして遊ぶ時間や環境、自ら運動する機会が減少し、多様な動きを経験・獲得できず、体の操作が未熟な幼児が増えている。

幼児は夢中になって楽しく遊ぶ中で、多様な動きを経験し、繰り返し行うことで獲得し、動きが洗練されていく。楽しく体を動かす遊びは、運動を楽しむための基礎的な体力や運動能力を発達させるだけでなく、友達とのかかわりを通して、コミュニケーション能力、やる気や集中力、社会性や認知的能力などを育む機会を与える。

幼児期運動指針ガイドブック(2012)によると、幼児期の体を動かす遊びには、下記のような効果があると示されている。

(1) 体力・運動能力の基礎を培う

幼児期は、5歳頃までに大人の約8割程度まで神経機能が発達するといわれ、運動を調整する能力が顕著に向上する時期である。この時期に培われる基本的な動きは、より複雑な遊びや運動の基礎を育むだけでなく、様々な危険から身を守るための基礎を育むことにもなる。また、筋力や持久力は、遊びや運動をより活発に行うためだけでなく、体力の重要な要素でもある。

幼児期は、筋力や持久力が著しく発達する時期ではないが、日頃から体を動かすことは、結果として穏やかに持久力や心肺機能を高めることにもつながる。

(2) 丈夫で健康な体になる

運動習慣を身につけると、身体諸機能における発達が促され、健康的で活動的な生活習慣の形成にも役立つ可能性が高くなる。積極的に体を動かして遊ぶことで、お腹がすいておいしく食事を取ったり、適度に疲労することで十分な睡眠が取れるようになる。それらを継続することにより、健康的に運動習慣が身につく。幼児にとって体を動かして元気に遊ぶことは、身体的にも精神的にも健康を維持することにつながると考えられる。

さらに、肥満や痩身の問題は、栄養摂取の偏りと運動不足が大きな原因だが、これらは

骨の形成にも影響する。

骨の形成には、栄養摂取だけでなく、適度な運動が必要不可欠である。よって、幼児期でも適切な運動をすると丈夫でバランスのとれた体を育みやすくなり、肥満や痩身を防ぐ効果があると考えられる。

(3) 意欲的に取り組む心が育まれる

幼児にとって体を動かす遊びなど、思い切りのびのびと動くことは、何事にも意欲的に取り組む態度を養い、健やかな心の育ちも促す効果がある。

積極的に体を動かす幼児は、「やる気」「我慢強さ」「友達関係が良好」「社会的」など、前向きな性格傾向にあり、このような傾向は、有能感や自信に支えられている。

幼少年期における遊びや、運動に関する有能感は、遊びの経験を通じた成功体験によってその基礎が作られ、その後の運動やスポーツ活動につながっていく。有能感を持てる子どもは、運動が好きになり運動する機会も増えていくが、逆に「無力感」を抱くようになるとその機会も減少していく。

(4) 協調性やコミュニケーション能力が育つ

幼児期は、多くの友達とかかわりながら遊ぶことを通して、ルールを守り、自我を抑制し、コミュニケーションをとり合いながら協調・協働することを学んでいく。体を動かす遊びや運動、特にルールのある遊びやスポーツなどは、社会性を育てる契機を与え、また、体を動かして遊ぶことは、爽快感や達成感を味わいながらのストレス発散にもつながる。

(5) 認知的能力の発達にも効果がある

運動を行うときは状況判断から運動実行まで脳の多くの領域を使用する。運動が知的能力にもよい効果をもたらす可能性が示され、すばやい方向転換などの敏捷な身のこなしや状況判断、作戦などの思考判断を要する全身運動は、脳の運動制御機能や知的機能の発達促進に有効であると考えられる。

このような、運動能力の発達の特性や、運動遊びの意義を踏まえて、体を動かしたくなる環境構成や、個の発達に応じた援助の工夫、指導方法について研究を進めていくことが大切である。

3 運動遊びにおける環境構成や援助の工夫

幼児期運動指針ガイドブック(2012)では、幼児期の運動を推進するための配慮事項として、次のことを挙げている(表2)。

表2 幼児期の運動を推進するための配慮事項

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">○ 一人一人の発達に応じた援助をすること○ 幼児が思わず体を動かしたくなる環境を工夫すること○ 安全に対する配慮をすること |
|---|

(1) 環境構成の工夫

① 遊ぶ場所や遊具の安全点検

幼児が安全に楽しく過ごすためには、危険な場所、危険な遊び方などは、全職員で共通理解をして、誰もが安全な遊び方をしっかりと指導していく体制を作ることが大切である。そのために、園庭、固定遊具、室内など幼児が日頃遊ぶ場所や、大型遊具の安全な置き方(積み方)、遊具の破損、幼児が好きな隙間や高いところに危険物はないかなどの安全点検を定期的に行うことが大切である。

② 園庭の固定遊具の工夫

固定遊具にも、幼児の遊びに応じて布やゴムなどを加えたり、ロープを結んだり、幼児の動線を予想した遊具や用具の配置、場の構成にも配慮する。そうすることで、探検や修行、鬼ごっこなどの様々な遊びが生まれ、多様な動きを引き出すことができる。

また、挑戦意欲がかき立てられるように遊具に目印や色をつけることで、「やってみたい」「おもしろそう」などと、苦手意識を持っている幼児も抵抗なく取り組み、体を動かすことを楽しめるようになる。

このように固定遊具を工夫し、「運動チャレンジカード」等を活用することで、戸外での運動遊びの発展につながると考える。

③ 遊戯室の環境構成

遊戯室は、集団遊びや運動遊びをする場

と、様々な集会をする場として兼用しているため、広さが確保されている。いつでもすぐ使えるように、巧技台や平均台、マット、跳び箱、トランポリン、大型積み木など、遊戯室で使う遊具は遊戯室に集め、全職員で決められた場所に遊具を置くことや、大型遊具の安全な片付け方などを共通理解しておく必要がある。

④ 保育室の環境構成

幼児は、ビニールテープで床や廊下に行くつかラインを引いたり、長さの違うヒモ(的)をぶら下げているだけで、体を動かした遊びを楽しんだりする。

また、いろいろな素材を集めておくと、新聞紙やペットボトルなどの身近な素材を使って剣やボール、的、ピン、ゴールなどの遊具を作る。そこで教師が意図的な援助を行えば、戦いごっこや的当て、ボーリングやバスケット遊びなど、自然に運動遊びにつなげていけると考える。

⑤ 運動遊具の充実

縄やフープ、輪、ボール、竹馬などは、「やってみたい」と思っているときに、みんなで取り組めるよう数を揃える。(クラス全員分か半数分)また、個々の運動能力の発達に合わせてそれぞれが楽しめるように、大きさや長さ、高さなど違うものを揃える。

巧技台などの大型遊具の種類や数なども揃えておくと、幼児の発達や遊びに応じて配置や組み合わせなどを変化でき、遊びも広がり、興味が持続して繰り返し遊んだり、様々な動きに挑戦したりして、動きも洗練されていくと考える。

(2) 個の発達に応じた援助

幼児期運動指針ガイドブック(2012)に、「幼児期は心身の発達が著しい時期ですが、その成長は個人差が大きいので、幼児に体を動かす遊びを提供するに当たっては、一般的な発達の特性の理解だけでなく、一人一人の発達に応じた配慮が必要です」と示されている。

個の発達に応じた援助を行うためには、まず、個々の実態(身体的発達、運動能力、理解力、これまでの活動経験など)をできるだけ細かく把握する。

つぎに、その幼児が何に（どんな遊びに）興味を持っているのか、得意なこと、苦手なこと、コミュニケーション能力なども考慮して、運動遊びの提供や援助を工夫していく。その際、運動遊びに対して、①興味がないのか、②興味はあるけど苦手意識の方が強くて取り組まないのか、③方法がわからず困っているのか、④苦手だけど頑張りたいのか、⑤運動遊びが大好きなのかなどの、思いを読み取ることで、よりその幼児の思いに寄り添った適切な援助につながると考える。

また、教師自身も積極的に幼児と一緒に体を動かし、楽しい雰囲気を作ったり、いろいろな遊びを伝えていくことで、幼児が取り組んでみたいと思えるような意欲を喚起したり、取り組んで楽しかったという充実感や満足感を味わうことができると考える。

4 多様な動きが経験できる運動遊び

幼児期運動指針ガイドブック（2012）では、幼児期の運動のあり方を表3のように示している。

表3 幼児期の運動のあり方

○ 多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること
○ 楽しく体を動かす時間を確保すること
○ 発達の特性に合った遊びを提供すること

(1) 好きなものになりきるごっこ遊び

アニメの主人公や忍者、ヒーローになって、鬼ごっこをしたり、戦ったり、修行したりして遊んだり、いろいろな動物を体を使ってのびのびと表現したりする。このような遊びの中で、歩く・走る・止まる・つかむ・投げる・ジャンプする・登る・（飛び）降りる・伸ばす・曲げる・避けるなど、多様な動きを経験し獲得することができると思う。

(2) 音楽に合わせて行う遊び

リトミックやリズム遊び、ダンスなど、音楽に合わせて思い切り体を動かしたり、のびのびと表現したりしながら、楽しく多様な動きを経験できる。また、友達と息を合わせたり、楽しさを共感したりしながら、リズム感

なども育っていくと考える。

(3) 遊具を使った遊び

ボール、縄、フープ、輪、大型積木、平均台、巧技台、跳び箱、トランポリン、マットなどを使用して遊ぶ中で、操作したり、バランスをとったり、力加減をコントロールしたりする。

また、友達と一緒に作ったり、片付けたりする中でも、持ち上げたり、運んだり、積み上げたりするなど、多様な動きの経験につながる。

さらに、遊具を組み合わせたたり、幼児の発達や興味に合わせて構成の仕方を工夫すると、難易度が上がり挑戦意欲をかき立てたり、達成感や充実感も味わうと考える。

(4) 身近な物を使った遊び

新聞紙、ペットボトル、ゴムなどを使って手作りの遊具を作って遊んだり、自分たちで遊び方やルールを決め、集団遊びやゲームなどを展開していく。このような遊びを通して、友達とのかかわり方や、ルールを守る大切さなども経験し、学んでいくと考える。

5 運動遊びの指導のポイント

運動遊びを指導・展開していく際に、教師は幼児の持っている力を最大限に発揮できるように、様々な配慮をしなければならない。その配慮すべきポイントを、『幼児体育－理論と実践－』（2011）では、3つの観点からまとめられている。

(1) 指導を展開する上で配慮する点

① 簡単なことから段階指導

誰もが興味を持って取り組んだり、自分なりに目標を持ったり、自分のペースで参加できるよう、参加する幼児の運動能力の発達に合わせて段階を調整していくことが大切である。

② グループ遊びは少人数から

はじめから大人数でグループ遊びを行うと、役割がなかなか回ってこず、一緒に遊んでいる感や楽しさが薄れ、遊びが自然消滅することも多い。少人数から行うことで、一人一人が自分の役割を実感し、楽しさを感じて自分たちで遊びを進めていけるようになると思う。

③ ルール理解のための展開

ルールが理解できるよう、ルールを明確でわかりやすく工夫したり、ルールを守ることによって、遊びが楽しくなる経験ができるようにすることが大切である。

④ メリハリのある展開

静と動、力合わせや力くらべなど、幼児の興味・関心・理解度に合ったメリハリのある流れを工夫することで、集中力も持続できると考える。

⑤ 十分な運動量

幼児が自分のしたいことを見つけて遊べる環境を整え、思い切り体を動かして遊べる展開を工夫することが大切である。

⑥ 仲間作り遊び

仲間づくり遊びを通して、自分の力や相手の力を感じ合い、相手に対して自分の力をコントロールすることができるようになっていくと考える。

⑦ 繰り返し丁寧な指導

幼児は楽しみながら繰り返すことで動きを獲得することを踏まえ、個々のねらいを持ち、習慣化されるまで繰り返し丁寧に指導することが大切である。

⑧ 安全への配慮

大切な幼児の命を預かっていることを念頭に置き、気の緩みや錯覚、手抜き、憶測などによるケガや事故のないよう、安全に十分な配慮をすることが大切である。

⑨ 誰もが楽しめる工夫

幼児一人一人の心身の発達や経験に関わらず、誰もが楽しさを感じられるような、遊びの展開を工夫することが大切である。

⑩ 幼児の考えを取り入れた展開

幼児がいろいろなことに「気づき」「考えたり」「試したり」して遊ぶように、遊び込める展開を工夫することが大切である。

(2) 子どもとのかかわりで配慮する点

① 声かけや援助

幼児の実態を把握し、個に応じた具体的にわかりやすい指導・援助を行うことが大切である。

② 幼児の興味関心を引き出す工夫

幼児の興味・関心・意欲が生まれ、楽しく

て繰り返したくなるような声かけや援助を行うことを心がける。

③ 幼児理解

個々の幼児の実態を知り、行動特徴を理解して、状況に応じた対応ができるようにすることが大切である。

行動特徴とは、例えば、頭部が大きく重たいため、重心が高く、転倒、転落しやすい、自分の見えている範囲以外のことが認知しづらい、危険を予知する能力が低いということ。また、ヒーローなどになりきって遊ぶことや、見えない所で遊ぶことが好きなどである。それらを理解することで、事故発生の要因や可能性を予測し、対策を考えることが可能になると考える。

(3) 用具の理解について

① 用具の安全な使用方法の理解

教師が用具の使い方を理解することで、安全に楽しく遊ぶことができ、幼児へも遊具の正しい使い方や安全な使い方を指導することができると思う。

② いろいろな遊具で創意工夫

縄だからすぐ縄跳びをするのではなく、いろいろな縄あそびから取り入れることで、幼児が興味を持つきっかけ作りや、苦手な幼児も抵抗なく取り組むという、指導や援助の工夫になる。また、身近な物を使って遊具を作り、遊びを紹介することで、幼児も自分で作ったり、試したりして、遊びが広がっていくと考える。

③ 準備や片付けの安全指導

幼児が自分たちで遊びを進めていけるように、片付ける場所をわかりやすく整理したり、遊具を安全に取り扱う方法も、教師が見本を見せながらしっかり指導することが大切である(図1)。



図1 大型遊具の取り扱い指導

6 運動遊びで育つ力

幼稚園で行う運動遊びと、その遊びを通して育つものを下記の表にまとめた（表4）。

表4 運動遊びで育つ力

遊具	場所	活動内容	遊びで育つもの
道具を使わない運動遊び	室内	<ul style="list-style-type: none"> 進む（歩く・おしり歩き・はいはい・クモ歩きなど） いろいろジャンプ（片足跳び・両足跳び・遠くに跳ぶなど） 片足バランス ・スキップ なりきりごっこあそび 手押し車 ・足踏みっこ ボートこぎ ・うまとび ネコとネズミ（鬼ごっこ） 	<ul style="list-style-type: none"> 移動系運動スキルの向上 平衡系運動スキルの向上 リズム感 ・平衡性 ・巧緻性 敏捷性 ・瞬発力 ・身体認識力 腹筋力 ・背筋力 ・脚力 ・腕力 柔軟性 ・スピード感 ・調整力 持久力 ・空中バランス ・協応性 走力 ・空間認知能力 ・模範能力 判断力 ・集中力 ・正しい姿勢作り 協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性
	戸外	<ul style="list-style-type: none"> かけっこ ・リレー 鬼ごっこ（色おに・高おに・影踏みなど） 	
新聞紙	室内	<ul style="list-style-type: none"> ちぎったり、丸めたり、長くしたり、細く丸めたり、ねじったり 新聞紙プール 投げる（上に・遠くに・的当てなど） 落とさないように走る 小さくなる島 しっぽ取りゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> 操作系運動スキルの向上 移動系運動スキルの向上 瞬発力 ・走力 ・スピード感 巧緻性 ・空間認知能力 ・腕力 筋力 ・平衡性 ・協応性 協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性
フープ・輪	室内	<ul style="list-style-type: none"> 相手に向かって転がす 転がっているフープをくぐる フープごま ・なべなべそこぬけ 島とびわたり ・けんけんば 通り抜け競争 	<ul style="list-style-type: none"> 操作系運動スキルの向上 移動系運動スキルの向上 リズム感 ・巧緻性 ・柔軟性 身体認識力 ・空間認知能力 スピード感 ・瞬発力 ・集中力 協応性 協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性
	戸外	<ul style="list-style-type: none"> いろんなところでフープ回し フープなわとび 	
短縄・長縄	室内	<ul style="list-style-type: none"> 縄の上を歩く 縄を踏まないように進む ジャンプ（へび・なみ・やまなど） 上をまたぐ ・下からくぐる ウサギとオオカミ（鬼ごっこ） ぐるぐるトンネル 	<ul style="list-style-type: none"> 移動系運動スキルの向上 操作系運動スキルの向上 瞬発力 ・巧緻性 ・空間認知能力 身体認識力 ・柔軟性 ・協応性 筋力 ・リズム感 ・平衡性 調整力 ・空中バランス能力 創造力 ・集中力 ・敏捷性 協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性
	戸外	<ul style="list-style-type: none"> 縄回し（片手・両手） 縄とび（前回し・後ろ回し・あや跳び・かけ足跳び・仲良し跳びなど） 長縄（郵便屋さん・大波小波など） 	
ボール	室内	<ul style="list-style-type: none"> 世界一周 ・ボールの帽子 つく（立つ・座る・左右の手・歩き・走り・スキップなど） 転がす ・捕る ・バウンドキャッチ 投げる（両手・片手・的当て・相手になど） 	<ul style="list-style-type: none"> 操作系運動スキルの向上 移動系運動スキルの向上 協応性 ・柔軟性 ・身体認識力 巧緻性 ・空間認知能力 ・敏捷性 瞬発力 ・リズム感 ・平衡性 協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性
	戸外	<ul style="list-style-type: none"> サッカー ・ドッジボール 当ておに ・キックベース 	
大型遊具	室内	<ul style="list-style-type: none"> 平均台 ・巧技台 ・とびばこ マット ・トランポリン ドリームトンネル ・大型積み木 	<ul style="list-style-type: none"> 平衡系運動スキルの向上 移動系運動スキルの向上 空間認知能力 ・身体認識力 ・筋力 巧緻性 ・柔軟性 ・平衡性 ・腕力 瞬発力 ・空中バランス能力 ・脚力 協応性 ・リズム感 ・集中力 回転感覚 ・協調性 ・持久力 協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性
	戸外	<ul style="list-style-type: none"> ブランコ ・ジャングルジム ・滑り台 うんてい ・登り棒 ・鉄棒 ターザンロープ ・タイヤ跳び 	

前橋 明 『0～5歳児の運動遊び指導百科』 ひかりのくに 2004

表4の運動遊びを通して育つ力を踏まえ、本研究では、運動遊びを楽しみながら、個々の力をより伸ばしていくことを考え、環境構成や個の発達に応じた援助の工夫を、遊戯室で行う運動遊びに絞って検証保育を進めていく。

VII 保育実践

- 1 題材名 『遊戯室を活用した運動遊び』
- 2 ねらい

遊戯室を活用した運動遊びを通して、いろいろな運動遊具に触れたり、運動遊具を使って試したり工夫したりして遊ぶ中で、多様な動きを経験したり、友達と一緒に思い切り体を動かして遊ぶ充実感や満足感を味わう。

- 3 題材について

(1) 学級の幼児の姿

歌やリズムダンスが大好きで、音楽が聞こえると体を動かしたり、戸外や体育館で自由に体を動かしたり、走り回ったり、競争したりする遊びが好きな幼児が多い。楽しくなると注意力が散漫になり、ケガをすることもあるが、しっかり話を聞いて素直に受け入れたり、友達の良い面を見つけてや認め合ったり、いけない面を注意したり、意見を言い合ったりする姿が見られる。特に女児は元気があり、様々な活動に対して積極的に取り組む幼児が多い。しかし、中には運動遊びの経験が少なく、体を動かす遊びに興味が悪かったり、動きがぎこちなかったり、苦手意識からか取り組みが消極的な幼児もいる。友達関係が深まると、誘い合って挑戦したり、教え合ったり、競い合ったりしながら、少しずつ運動遊びに挑戦する様子が見られるようになってきた。

(2) 題材として取り上げた理由

本学級は、広い場所で自由に体を動かすことは好きだが、運動的な要素や技能を伴う遊びでは、ぎこちなさや苦手意識を持っている様子を感じられる幼児もいる。保護者アンケートや幼児への聞き取り、園での遊びの様子から、経験不足が主な要因だと感じられたので、園生活の様々な場面で、多様な動きを経験できる遊びの工夫や個に応じた援助の必要性を感じていた。

そこで、戸外とは違った遊具を使って多様な動きを経験できる遊戯室で、友達と一緒に運動遊びに取り組むことで、互いに刺激し合い、良さを認め合いながら、体を動かす遊びの楽しさや充実感を味わい、進んで体を動かすことを楽しめるのではないかと考え、題材として取り上げた。

- 4 検証保育の全体計画

検証保育の実践にあたり、下記のような全体計画を立てた（表5）。

表5 検証保育計画表

実践	日程	題材名	ねらい	内容
1	8/28 (木)	・アンケート調査① ・運動能力テスト①	・幼児の実態や家庭での実態を調査し、保育実践の指標とする。	・幼児への聞き取り調査① ・保護者へのアンケート調査① ・幼児の運動能力テスト①
2	11/11 (火)	・思い切り体を動かしてみよう	・自分の体の動きや力の使い方を意識しながら、友達と一緒に運動遊びを楽しむ。 ・身近な素材（新聞紙）を使った運動遊びを楽しむ。	・道具を使わない運動遊びをする。 ・新聞紙を使った運動遊びやゲームをする。
3	11/13 (木)	・フープで遊ぼう	・フラフープや輪を使った運動遊びを楽しむ。	・フープや輪を使って、転がしたり、回したり、くぐったりして遊ぶ。
4	11/18 (火)	・縄で遊ぼう	・縄を使った運動遊びを楽しむ。	・縄を引いたり、動かしたり、跳んだりなど、縄を使って遊ぶ。

5	11/20 (木)	・ボールで遊ぼう	・ボールの感触や特徴に気づき、ボール遊びを楽しむ。	・ボールを転がす、つく、投げる捕るなど、ボールを使って遊ぶ。
6	12/9 (火)	・大型遊具で遊ぼう	・巧技台、平均台を使って、安全に気をつけて、扱い方や遊び方を知る。	・巧技台や平均台で、安全な扱い方や遊ぶ方法を知りながら、いろいろな動きを経験する。
7	12/16 (火)	・そら組公園で遊ぼう①	・これまで行ってきた運動遊びを組み合わせてコーナーを作り、いろいろな運動遊びを楽しむ。	・みんなで話し合いながら、運動遊びのコーナーを作って、好きな運動遊びをする。
8	12/18 (木)	本時 ・そら組公園で遊ぼう②	・みんなで相談して作ったコーナーで、友達と一緒にいろいろな運動遊びを楽しんだり、自分なりの目標を持って挑戦したりする。	・みんなで相談してコーナーを作る。 ・作ったコーナーで、ルールを守りながら、自分のペースで運動遊びに挑戦する。
9	1/8 (木)	・新しいそら組公園を作って遊ぼう ・アンケート調査②	・友達と一緒に運動遊びのコーナーを作ったり、動きを工夫したりして運動遊びを楽しむ。 ・幼児、家庭への調査を行い、前回との変容や課題について考察する。	・2学期前半から引き続き、みんなで相談して新しいそら組公園を作って遊んだり、いろいろな動きをを考えたりする。 ・幼児への聞き取り調査② ・保護者へのアンケート調査②
10	1/13 (火)	・そら組サーキットで遊ぼう	・運動遊びの遊具を組み合わせてサーキットを作り、友達と競い合ったり協力したりする楽しさを味わう。	・これまでの運動遊びの遊具を組み合わせてサーキットを作り、みんなでゲームをしたり、競争したりする。
11	1/15 (木)	・運動能力テスト②	・テスト結果も踏まえ、成果や課題について考察する。	・幼児の運動能力テスト②

5 本時までの遊びの様子

【実践2】	内 容	・道具を使わない運動遊びや、新聞紙を使った遊びをする。
11/11 (火)	環境構成	○ 遊びに必要な機具・材料（デッキ・曲・タンバリン・ベル・ガムテープ・セロハンテープ・ビニールテープ・PPヒモ・はさみ・雑巾など）を準備しておく。 ○ 大きく動き回るので、使用しない物は片付けて、遊戯室を広く使えるようにしておく。 ○ 事前に活動を予測し、ビニールテープを等間隔で貼ったり、目印をつけておく。 ○ 新聞紙遊びの際、幼児がセロハンテープやガムテープが使いやすいように設置する場所を作る。
思い切り体を動かしてみよう	教師の援助	☆ 活動前に気持ちを落ち着け、見通しを持って取り組めるように、内容や安全の約束について、全体で話し合う。 ☆ わかりやすく伝えたり、楽しさを共有するため、教師も一緒に遊びに参加し見本を見せる。 ☆ うまくできない幼児に、励ましの声かけをしたり、そばで一緒にやってみせたり、手を添えたり、コツや方法を具体的に説明したりなどの個人指導や援助を行う。 ☆ 幼児の遊びの様子を見ながら、進行したり、レベルアップしたりする。 ☆ 幼児に考えてほしいところや工夫してほしいポイントを投げかけ、自分なりに考えたり、工夫したりする時間を取る。
【実践3】	内 容	・フープや輪を使って、転がしたり、回したり、くぐったりして遊ぶ。
11/13 (木)	環境構成	○ フープ・輪などを準備しておく。 ○ 安全面への配慮として、広さに合った人数ずつで遊びを進める。 ○ 競争もあるので、事前にスタートラインを引き、折り返し目印になる物（カラーコーン・ペットボトルなど）を準備しておく。 ○ 遊びの内容に応じて、フープ（プラスチック素材）を使用するか、輪（ゴムホース）を使用するか工夫する。
フープと輪で遊ぼう		

フープと遊ぼう	教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 事前に内容の説明や、安全の約束について再確認する。 ☆ 友達と一緒にする遊びは、相手と声をかけ合ったり、相談したり、相手のことを考えて力を入れたりできるような声かけをする。 ☆ 勝負の楽しさがわかるよう、勝った嬉しさを共感したり、頑張っている姿を認めたり、悔しさを次の意欲につなげるような声かけをする。 ☆ こうしたらどうなるか、良い例や、ケガにつながりそうな危険な例を挙げて話し合い、幼児が自分で考えられるような援助を行う。
【実践4】	内 容	・縄を引いたり、動かしたり、跳んだりなど、縄を使って遊ぶ。
11/18 (火)	環境構成	<ul style="list-style-type: none"> ○ 短縄・長縄・ロープ・ガムテープなどを準備しておく。 ○ 縄で一本道を作り、縄の上を歩いたり跳んだりして遊ぶ際、安全のために両端をガムテープで固定する。 ○ 長縄での遊びは、勢い余って壁にぶつからないように、遊戯室の真ん中で行うようにする。
縄で遊ぼう	教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 事前に内容の説明や、安全の約束について再確認をする。 ☆ 運動遊びが得意な幼児の遊びの様子を伝え、動きを真似したり、良い方法に気づいたりなど、他児に良い刺激となるような声かけをする。 ☆ 動きがごちない幼児のそばでアドバイスしたり、一緒にやってみたり、手を引いたりなど、個の発達に応じた援助を行う。 ☆ 次はどうしたいか、どうしたらもっと楽しくなりそうか、幼児の考えやアイデアを引き出していけるような声かけをする。
【実践5】	内 容	・ボールを転がす、つく、投げる、捕るなど、ボールを使って遊ぶ。
11/20 (木)	環境構成	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボール・箱・フープなどを準備しておく。 ○ 一人一人が十分に触れたり、集中して遊んだり、また、みんなで一斉に取り組めるように、ボールは人数分揃える。 ○ ねらって投げる遊びでは、距離を長くしたり、箱やフープの大きさを変えたり、片手投げに挑戦させたりと、徐々にレベルアップしていく。 ○ 隣同士でぶつからないように、安全な距離の取り方を確認するなど、遊びの中で経験を重ね、幼児なりに安全な遊び方を身につけられるように援助する。
ボールで遊ぼう	教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 教師も一緒に遊ぶことで、楽しさを共感したり、うまくできない幼児へ見本を見せて良い方法に気づかせ、自信につなげるような援助を行う。 ☆ 自分なりに挑戦したり、工夫したりしている様子を認め、褒めたり、他児に伝えたりして、互いに良い刺激となるような声かけをする。 ☆ 転がすときのスピードや方向を、相手の動きや気持ちを考えながら、力加減をコントロールできるような声かけをする。
【実践6】	内 容	・巧技台や平均台の安全な扱い方や遊ぶ方法を知ったり、登ったり、ジャンプしたり、バランスをとったり、くぐったりなど、いろいろな動きを経験する。
12/9 (火)	環境構成	<ul style="list-style-type: none"> ○ 巧技台・平均台・跳び箱・マット・トランポリン・ドリームトンネルなどの大型遊具を準備しておく。 ○ 大型遊具なので、安全のために十分な広さの確保や、組み合わせる場合は、互いがぶつからないように配置を工夫する。 ○ 遊具がきちんと積み重なっているか、ズレて危険な箇所はないかなどの安全点検を定期的に行う。
大型遊具で遊ぼう	教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 安全な取り扱い方について、正しい方法、危険な方法、その危険性など例を挙げながら、1つ1つ丁寧に説明していく。 ☆ 大きな遊具なので、準備や片付けも友達同士で協力し合えるようにし、声をかけ合ったり、相手の動きに合わせてたりして、協力する楽しさを味わえるようにする。 ☆ 幼児の遊びの様子に合わせて、優しいものから少しずつ難しいものへレベルアップしていく。 ☆ 遊具を組み合わせたサーキットのようなコースを、幼児のイメージを大切にしながら教師も一緒に考え、いろいろな動きが経験できるように構成する。

【実践7】 12月16日(火) そら組公園で遊ぼう①

【内容】 ・みんなで話し合いながら、運動遊びのコーナーを作って、好きな運動遊びをする。

【環境構成】 ○これまで経験してきた運動遊具や材料・機具を準備して、幼児が見やすいように設置しておく。

○これまでのことを振り返り、こういう公園にしたいとイメージしやすいように、これまでしてきた運動遊びの内容を表示しておく。

○幼児の提案を聞きながら、互いの遊びがぶつからないように、安全な間隔を確保しながら遊具設置の援助をする。

○遊具がしっかり積み重なっているか、ズレて危険なところはないか、常に安全点検を心がける。

【教師の援助】 ☆幼児がそれぞれ自分の好きな運動遊びに取り組めるように、どの遊具を使って公園を作るか、ルールなども全体で話し合っていて決めていく。

☆友達同士で声をかけ合いながら準備・遊び・片付けまでできるように声かけする。

☆友達同士で教え合ったり、励まし合ったりする場面を捉え、優しい気持ちや言葉に共感したり、認めたりする。

【幼児の姿】

巧技台とすべり台を合体

ここはボール遊びコーナー

すべり台
楽しい～♪



ちゃんと
つかまえてるから
大丈夫だよ

斜めのはしごにも挑戦してみよう



オレは
おさるだから
大丈夫

はしごの下から渡ってみよう

【反省】

- ・これまで安全に遊ぶための指導を徹底してきたことで、幼児が安全を意識しながら遊具を取り扱ったり、遊びを進める姿が見られた。
- ・幼児と相談しながら公園を作ったので、同じ遊具でも自分なりに遊び方を工夫して楽しむ様子が見られた。
- ・幼児の提案から、雲底を作るため巧技台を高く設置したので、安全管理のため教師がその場から離れられず、幼児の待ち時間も増え、その他の遊びも広げることができなかった。そのため、好きな運動遊びに取り組むというねらいが十分に達成できなかった。本時では、今回の遊びの様子から使用する遊具をある程度予想し、遊具の配置や環境構成を計画しておく(図3、表6)。

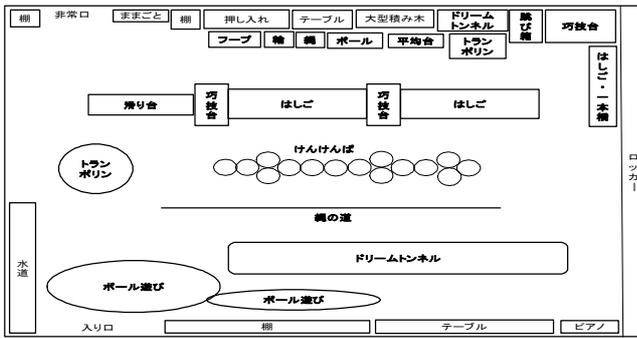


図2 12月16日(火)の環境構成図

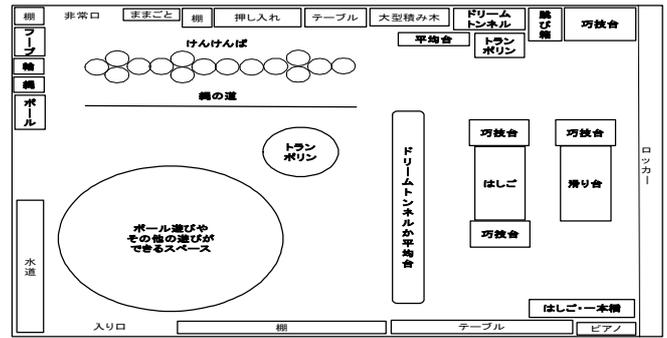


図3 前時の反省を踏まえた環境構成計画図

表6 前時の反省を踏まえた環境構成や援助の工夫

前時の反省	改善方法
●巧技台を高くしたことで、安全管理のために教師がそばを離れられず、その他の遊具を使った遊びを広げていくことができなかった。	○教師がそばを離られるように巧技台の高さを低くしたり、低くても楽しめる動きを提案したりする。
●はしごと滑り台を初めて使ったので、人気集中し、幼児の待ち時間が長く、いろいろな遊びを楽しむことができなかった。	○はしごと滑り台を分けて設置し、幼児がそれぞれ好きな運動遊びに取り組めるようにする。
●一緒に設置した巧技台以外の遊具を使って、好きな運動遊びに挑戦してもいいという声かけがうまく幼児に伝わらず、しばらく巧技台以外の遊具がなく、いろいろな遊具で遊ぶ時間が少なくなった。	○遊びながら遊具を1つずつ設定するのではなく、全てのコーナーを始めに設定してから、遊びを始める。 ○教師がこれまでの幼児の遊びの様子から、興味を持っているものを把握し、あらかじめ環境構成の計画図を考え、援助していく。
●幼児が見やすいように、これまでの遊びの表示や全ての運動遊具を一カ所にまとめて置いたが、活動中の遊具の出し入れの際、場所が狭かったり、幼児が遊具や友達にぶつかったりする場面があった。	○大型遊具とその他の運動遊具を分けて置き、遊ぶ場所もその近くに設けることで、互いがぶつからないで十分に遊びを楽しめるようにする。

6 本時の保育

検証保育 実践事例 『そら組公園で遊ぼう②』

保育指導案

平成26年12月18日(木) 10:30~12:00

そら組 男児10名 女児13名 計23名

教諭 前田 一美

幼児の姿	・今までやった運動遊びを自由に組み合わせて「公園を作ろう」と伝えていたので、どの遊びをしたか、どのように組み合わせたいか考え、「先生、今日は公園作るんだよね」「大きくしてからうんていにしたい」と、期待いっぱいでもとても楽しみにしている様子がうかがえた。 ・準備、遊び、片付けまで、みんなで一緒にするよう声かけをすると、進んで活動に取り組む様子から、遊戯室での遊びに対する意欲がうかがえた。	ねらい	◎みんなで相談して作ったコーナーで、友達と一緒にいろいろな運動遊びを楽しんだり、自分なりの目標を持って挑戦したりする。
		内容	・みんなで相談してそら組公園を作る。 ・作ったコーナーで、ルールを守りながら、自分のペースで運動遊びを楽しむ。

時間	予想される幼児の姿	教師の援助	環境構成
10:20	<p>○始まる前のひととき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達同士で今日の遊びに期待を持って話す様子が見られる ・グループごとに座って待つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・検証保育が始まる前に、幼児が緊張しないように、参観する先生方について話をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児がこれまでのことを振り返り、公園作りをイメージしやすいように、これまでの運動遊びの内容を表示しておく。
10:30	<p>○運動遊び前の話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで楽しく遊ぶための約束について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなが安全に楽しく過ごせるよう、事前に注意事項や約束について再確認する。 	
10:35	<p>○準備運動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動できるよう広がって、ケガ予防のための体をほぐす準備運動をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児のケガ予防と、運動遊びへの導入として、体を温め、ほぐす準備運動を取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・BGMで楽しい雰囲気作りをする
10:40	<p>○公園作りの話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「これやったから、次は・・・」「この前これやって楽しかったから・・・」と、どの遊具をどのように組み合わせるか、前回の様子も踏まえ、遊び方やルールを相談する。 <p>(遊び方・ルール)</p> <ol style="list-style-type: none"> ①スタートとゴールについて ②各コーナーでの遊び方について ③途中で失敗した場面等について <p>○遊具の組み合わせ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使う遊具の数や高さなどを相談しながら遊具を組み合わせていく。 <p>○運動遊び開始</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・自分のペースで各運動遊びに挑戦していく。 	<p>○前回の遊びの様子を振り返りながら、どんなコーナーを作りたいか、幼児の声を引き出すようにする。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・意見がまとまらないときは、今後も時間があることを伝え、少しずつみんなの考えを試していくことを提案する。 ・みんなで楽しく遊ぶために、遊び方やルールなども相談して決めるので、話し合いを進めたり、まとめる援助をする。 ・遊具の取り扱いの際、方法や順番などを教えたり、ケガをしないように声かけを行う。 ・全体的に回りながら、危険な場所で注意を促す声かけをしたり、事故のないよう見守ったりする。 ・個人的な援助が必要な幼児に付いて、励ましたり、補助したり、できた喜びを共感したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊具がすぐ使えるように、幼児が見える場所に、運動遊具や素材を準備しておく。 ・前回から継続できるように、大型遊具を出しやすいよう準備しておく。 ・幼児がイメージしやすいように、遊戯室の見取り図を用意し、遊具の配置を図示する。 ・各遊具が邪魔し合わないよう、遊具と遊具の間隔や配置を工夫し、安全に十分配慮する。 <p>(使用する遊具)</p> <p>フープ・輪・縄・ボール 巧技台・平均台・跳び箱 トランポリン・ドリームトンネル・大型積み木等</p> <p>※小学校に相談してマットを借りる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使わない(余っている)遊具は、遊びの邪魔や危険のない場所に、寄せておく。 ・定期的に遊具がズレていないか、きちんと設置されているかを確認する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・「先生、見ててよ。これできるようになったよ。」とできた喜びを報告する。 ・「〇〇すごいね。」 「これはこんなするんだよ」 「△△もできるようになったね。良かったね。」 「□□、前進んでるよ」等と、友達同士で声をかけ合う様子が見られる。 ・運動能力の差から、「〇〇まだこれできないの」「遅い、早くやって！」等、マイナスの声も出てくる。 ・簡単にできるようになると、「先生、ここはこんなしよう」「これもう少し高くしたい」「こことここつなげよう」等、もっと楽しくするためのアイデアを提案する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達同士で教えたり、励まし合ったりする場面を捉え、優しい言葉や気持ちに共感したり、認めたりする。 ・運動が苦手な幼児へコツを教えたり、頑張りを認めたり、優しく見守っている幼児の態度を褒めたりなどの援助を行う。 ・幼児のもっといろんなことに挑戦したいという意欲を高めたいけるよう、アイデアを引き出したり、アドバイスする援助を行う。 	 <ul style="list-style-type: none"> ・遊びへの意欲や集中力が継続できるよう、遊びの様子に合わせて幼児の思いや提案を聞きながら、遊具の配置や難易度を変えていく。
11:30	<p>○片付け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで決められた場所に使った遊具を片付ける。 ・友達にぶつからないように移動したり、一緒に力を合わせて運んだりする。 	 <ul style="list-style-type: none"> ・片付けを最後まで頑張っている幼児や、友達と協力している様子を捉え、褒めることで、みんなで頑張ろうという意識を高める援助を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の遊具の扱い方を見ながら、危険の無いように声かけをしたり、決められた場所に片付けできるよう援助する。
11:45	<p>○運動遊び後の話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の楽しかったことや頑張ったこと、気づいたこと、困ったことなどの感想を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の幼児の感想を聞き共感したり、頑張りを認めたり、気づいたことを共有したりなど、個々の思いを受け止める援助を行う。 ・次回の予告をし、次への期待や意欲につなげるようにする 	
12:00	<p>○教室に戻る</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・遊具や遊戯室の整理整頓がきちんとされているか最終確認をする。
評価	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で好きな運動遊びを見つけ、自分なりの目標を持って挑戦していたか。 ・友達と一緒に楽しみながら、どうしたらできるか、考えたり工夫したりして取り組んでいたか。 ・遊びのコーナー作りや遊具の準備・片付けにも、積極的に取り組んでいたか。 		

7 本時後の遊びの様子

【実践9】 1月8日（木） 新しいそら組公園を作って遊ぼう

【内 容】・2学期前半から引き続き、みんなで相談して新しいそら組公園を作って遊んだり、いろいろな動きを考えたりする。

【遊びの様子】
 前回までのことを振り返り、新しいそら組公園をどのように作るかの話し合いを、K男が描いてきた設計図を参考にしながら進めていった。その他の幼児も、いろいろイメージが膨らんでいたようで、自分の考えを発言する子が多くなっていた。そのため、事前にみんなで相談することを伝えてはいたが、全てが設計図通りにならなかったと、K男がすねてしまう場面もあった。
 遊びをスタートすると、準備や片付け、遊具の変更まで自分たちで考えて行動し、重たい物を運ぶ時や遊ぶ時も、友達同士で声をかけ合い取り組む姿が見られた。

『輪なげ遊び』



入ったら
10点だよ

『長縄跳び』



郵便屋さん
郵便屋さん♪

『タオルタクシー』



安全運転
お願いします

『ハシゴ道陣取り』



じゃんけん
ぼん!

【実践10】 1月13日（火） みんなでそら組サーキットで遊ぼう

【内 容】・これまでの運動遊びの遊具を組み合わせてサーキットを作り、みんなでゲームをしたり、競争したりする。

【遊びの様子】
 前回、滑り台とはしごの道をつなげたいという提案で終わった活動から遊びを再開した。高さの違う2つの遊具をどうつなげるかみんなで相談し、階段でつなげたり、難易度を上げてはしごでつなげたりして遊ぶことになった。
 初めは興味を持って、どこまで手放しで渡れるか、速く渡れるかなど、友達と競い合いながら遊んでいた。しばらくすると遊びが鬼ごっこに変わり、数人の幼児がとこころ構わず走り回り出した。そのため、別の遊びをしていた幼児にぶつかったり、転んだり、ボールを投げて周りの幼児に当たったりする場面が出てきた。
 そこで、遊びに変化を取り入れ発展し、継続して楽しく遊べるように、活動の後半はそら組公園の遊具を組み合わせてサーキットを作り、競争をしてみようという提案をする。競争することに興味を示し、みんなでコースやチームを作って遊び始めた。初めは、競争の意味がわからず、隣の友達を待ってしまう幼児も数人いた。競争の意味がわかってくると、徐々に自分のチームを応援する声が出てきて、動きもうまく機敏になり、競い合うことを楽しむ様子が見られた。

『そら組サーキット』



「一本橋ハイハイはグラグラする」



「ボール持ってるからちょっと難しい」



「落ちないように気をつけよう」

VIII 研究の考察

1 作業仮説(1)の検証

遊戯室を活用し、運動遊具を使った遊びを工夫することで、多様な動きを身につけ、体を動かす楽しさや心地よさを味わえるであろう。

(1) 遊戯室で運動遊具を使った遊びの展開

① 手だて

遊戯室を活用し、身近な運動遊具を使った遊びを段階的に取り入れ、いろいろな動きを楽しみながら経験できるようにした。

② 結果

遊戯室での活動において、幼児が傍観したり途中でやめたりすることなく、自分のペースでいろいろな動きに取り組んでいた。その中で、自分が好きな遊びに繰り返し取り組み、徐々に動きのぎこちなさもなくなり、自分で新しい技を考え挑戦する姿が多く見られるようになった(図4)。



図4 『あんたがたどこさ♪』ができたよ

また、これまで運動遊びに消極的だった幼児も、途中で諦めずに最後まで取り組み、緊張していた表情が笑顔になり、「先生、できたよ」と喜ぶ声も聞こえてくるようになった(図5)。



図5 巧技台の山登りは簡単!

遊戯室での活動後に、幼児から感想の聞き取りを行うと、積極的に発表する子が増え、できるようになったことを喜んだり、次回を期待する声が聞こえた(表7)。

表7 活動後の幼児の感想

- ・「♪あんたがたどこさ、」までできるようになりました。
- ・ケンケンパで、1回も止まらないでできて嬉しかったです。
- ・はしごを手放しで渡れるようになって嬉しかったです。
- ・今度ははしごと一本橋つなげてみたい。

さらに、8月と1月に行った運動能力テストから、評価3以上の人数が増え、前回より結果が伸びた幼児も多かった(図6, 7)。

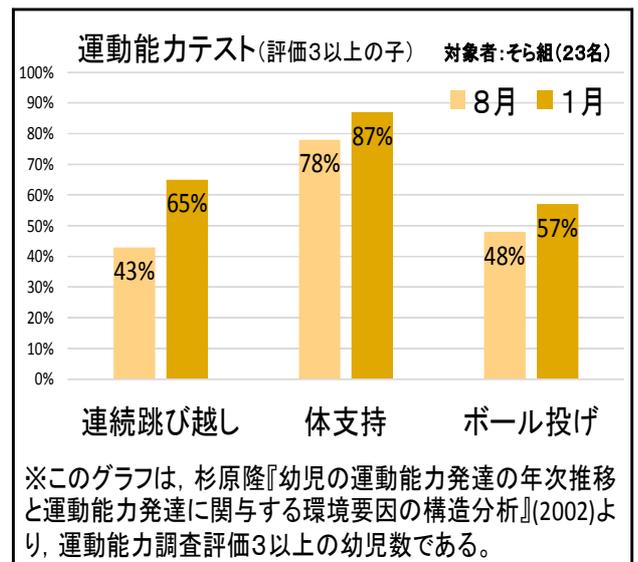


図6 運動能力テスト結果

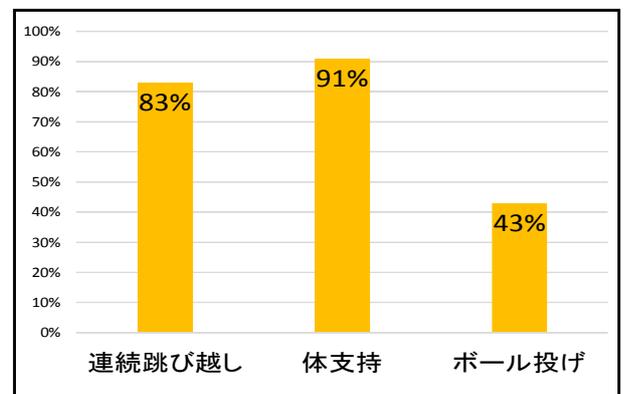


図7 結果が伸びた幼児数

③ 考察

遊戯室を活用し、身近な運動遊具を使った遊びを工夫したことで、幼児がいろいろな動きを繰り返し経験することができた。幼児の感想からも思い切り体を動かしたことで、体を動かす遊びの楽しさや、充実感、満足感を味わえたことがわかる。

また、遊びを幼児の興味や発達に応じて、段階的に展開したことで、運動遊びに消極的だった幼児も、途中で諦めずに取り組む姿が見られた。そのため、幼児が多様な動きを身につけ、ぎこちなさが減少し、力加減やバランス感覚が良くなるなど、運動能力が高まったと思われる。

(2) 体を動かす楽しさや心地よさを味わう

① 手だて

友達と一緒に挑戦したり、教え合ったり、協力したりする場面を大切にし、楽しさや心地よさを共感できるようにした。

② 結果

運動遊びにクラス全員で取り組むことで、友達の良いところを見て真似てみたり、励まし合ったり、教え合ったりする姿が見られた。また、感想や幼児同士の会話から、友達と楽しさを共感している声も聞こえた(表8)。

表8 幼児の声

<p>【幼児の感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・〇〇さんと、一本橋でじゃんけんぼんしたことが楽しかったです。 ・縄の「ぐるぐるトンネル」ができて楽しかったです。 ・トランポリンで先生の頭を超したことが楽しかったです。 <p>【幼児の会話】</p> <p>T男：「うさぎとオオカミ」が楽しかったなあ。</p> <p>Y男：オオカミに捕まりそうだったけど、ギリギリセーフだったなあ。</p> <p>H男：今日の「遊戯室で遊ぼう」楽しかったね。先生、明日も来る？また、ケンケンパできる？</p> <p>M子：今日一緒にすべり台したよね。</p> <p>K子：うん、楽しかったね。また一緒にしよう。</p>

感想を発表する際、これまで自分の思いをうまく伝えきれなかった幼児や、人前での発表が苦手だった幼児も、積極的に手を挙げて発表することができた。

今回、幼児の体を動かす楽しさの実態を知るために、「運動遊びは好きですか」という聞き取り調査を行った(図8)。

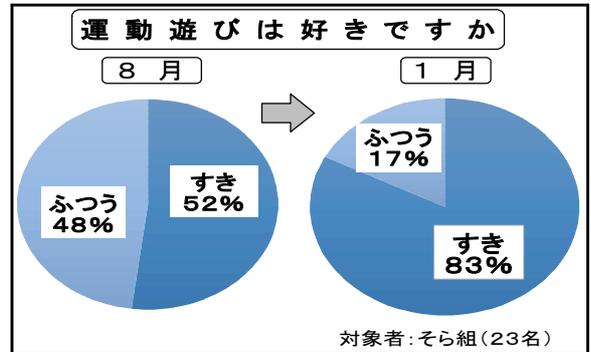


図8 幼児への聞き取り調査結果

さらに、それぞれの回答の理由を聞いてみると、表9のような理由があった。

表9 幼児の回答の理由

<p>【運動遊びが好きと答えた理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎ 楽しいから ◎ 難しいから挑戦したくなる。 ◎ 最初は上手じゃなかったけど、練習して上手になったら楽しくなる。 ◎ いろいろなもので遊べるから。 ◎ 友達に教えてもらってできるようになったから嬉しい。 <p>【運動遊びがふつうと答えた理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 今はこま回しに挑戦中だから、運動遊びはふつう。 ○ あまり難しくなくて、簡単すぎる。 <p>※運動遊びが嫌いという幼児はいなかった。</p>

③ 考察

友達と一緒に遊ぶという場面を大切にすることで、友達と声をかけ合いながら、達成感や充実感を味わい、友達と楽しさを共感していることがわかった。

また、遊戯室での運動遊びを通して、運動遊びが好きな幼児が増え、ほとんどの幼児が楽しみながら取り組んでいることがわかった。

遊びの中で、「簡単すぎる」という声から、運動能力の個人差に応じた内容を工夫する必要性を感じた。

さらに、人前で発表することが苦手だった幼児も、達成感が自信につながり、楽しさや自分の思いを伝えたいと、みんなの前で発表できたことから、運動への意欲が表現力の育ちにも大きな影響を与えたと思われる。

2 作業仮説(2)の検証

体を動かしたくなるような環境構成や、個の発達に応じた援助を工夫することで、体を動かそうとする意欲が育ち、進んで運動遊びに取り組むようになるであろう。

(1) 体を動かしたくなる環境構成

① 手だて

運動遊びで使用する道具や大型遊具を、遊戯室に集め、幼児と相談しながら遊びのコーナーを作り、より運動遊びに興味を持てるようにした(図9)。



図9 遊戯室の環境構成

② 結果

初めは、遊具を見て「今日はどんなことして遊ぶの?」と、教師の言葉を待っていたが、徐々に「先生、今日はこうやって遊びたい」と、自分の思いや考えを伝え、主体的に遊ぶようになった。

遊びのコーナー作りでは、「ここはこうしよう」「トランポリンも出したい」「ここだったら(周りとはぶつからないから)危なくないよ」など、遊具の準備や片付けも、幼児が進んで取り組むようになった。

また、大型遊具を運ぶ際には、「これ大きいから一緒に持とうね」と、友達同士声をかけ合って協力する様子も見られるようになった(図10)。



図10 「そら組公園作ろうよ」

そら組公園を作る際、幼児が理解しやすいように、教師が遊戯室の配置図を用いて話を進めたので、「次はそら組まつりがしたい」と、自分の考えた設計図を描いてきた幼児がいた(図11)。



図11 「そら組まつり」の設計図

③ 考察

体を動かすのに十分な広さと、いろいろな種類の大型・運動遊具を用意し、幼児が見えるように設置したことで、「早く遊びたい」と、運動遊びに興味を持ち、積極的に行動する幼児が増えた。

環境構成の設計図を図示したことで、みんなイメージを共有でき、相談しながら遊びを進めていくことができた。また、準備や片付けまで幼児が進んで行うなど、運動遊びへの意欲の高まりが見られた。

遊びたくなるような環境を整え、相談しながら進めるという手だてが、幼児の主体的な活動を促すことに効果的だった。

(2) 個の発達に応じた援助

① 手だて

励ましたり、見守ったり、見本を見せたり手を添えたりなど、個々の運動能力の発達に応じた援助を行うことで、運動遊びに消極的な幼児も抵抗なく取り組めるようにした。

② 結果

運動遊びに消極的な幼児へは、得意な幼児の様子に気づかせたり、励ましたり、教師が手を添えるなど、個の発達に応じた援助をすることで、繰り返し挑戦するようになった。

運動遊びに取り組むH男の変容

【4月～9月頃の様子】

集団保育の経験が無く、初めてのことに強い不安を抱き、怒った口調で話すことが多く、友達とかかわることが苦手なH男。教師との信頼関係を築き、園生活の仕方を個別に丁寧に指導し、H男のペースで焦らずゆっくり取り組ませていくことで、徐々に情緒が安定していった。

これまで戸外に出ることが少なく、運動遊びはほとんど経験が無いため、苦手意識が強かった。他児の様子を見せて楽しさが伝わるようにしたり、H男が興味を持ってできそうな運動遊びに「一緒に遊ぼう」と誘うが、「それはやらない」とその場を離れたり、「できないからやらないんだよ！」と怒って、挑戦する前からできないと決めつけて、あまりかかわろうとしなかった。

【11月～2月頃の様子】



遊戯室での活動では、H男も楽しんで参加できそうな、簡単な動きから取り入れ、楽しい雰囲気作りを心がけていった。



H男のペースに合わせて取り組んでいったことで、抵抗なく取り組み、できなくても怒ることなく何度も挑戦し、できるようになった喜びを感じられるようになった。少しずつ



できるようになったことで自信がつき、「自分でできる」と、教師の補助がなくても、友達の様子を真似して、



自分からいろいろな運動遊びに挑戦していくようになった。運動遊びをする中で、友達とのかかわりが深まり、友達同士誘い合って、積極的に戸外でも運動遊びに挑戦する姿が見られるようになった。



幼児が、家庭で運動遊びを楽しむ様子の変容を知るために、保護者アンケートを8月と1月に実施した。その結果、家庭でも活発に体を動かして遊ぶ幼児や、体を動かすことを楽しむ幼児が増えた(図12)。

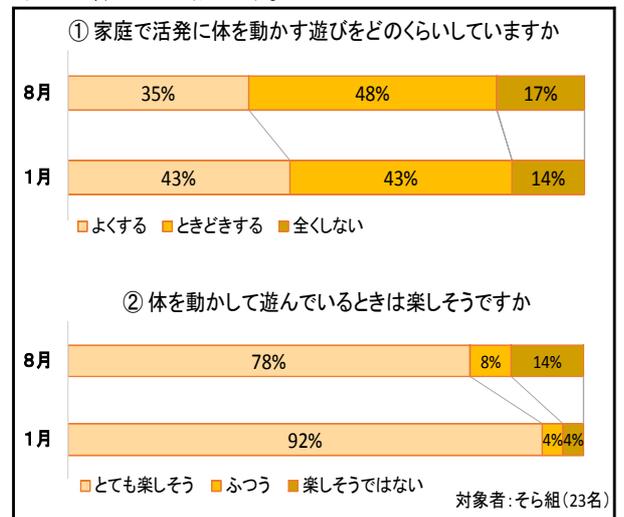


図12 保護者アンケートの結果

③ 考察

個の発達に応じた援助を行うことにより、H男の事例のように、運動遊びに消極的だった幼児も、友達の様子を見て真似たり、励まされたりして、不安や緊張を感じることなく自分のペースで運動遊びに取り組むことができた。そのため、友達と一緒に運動遊びを楽しみ、友達とのかかわりも深まった。また、できることが少しずつ増えたことが自信になり、別の運動遊びへの意欲につながったことから、この手だてが有効であった。

さらに、保護者アンケートの結果から、幼児が進んで体を動かして遊ぶことを楽しいと感じ、継続して家庭でも活発に体を動かして遊んでいることがわかった。

3 本研究を通して

本研究では、「運動遊びを楽しむ」ということを第1のねらいとして、活動の場を遊戯室に絞って検証保育を進めてきた。

結果、毎回幼児の楽しそうな様子や感想、発言、意欲の高まりなど様々な変容が見られ、今後もさらに教材研究を深めながら継続して取り組んでいきたい実践となった。

さらに、その影響が、本研究と平行して園で取り組まれているチャレンジカードにも現れていた。



図13 チャレンジカード

7月から実施しているチャレンジカードは、戸外での運動遊びへ、幼児の挑戦意欲を高めることをねらった取り組みである。誰でもできるような簡単なものから、少々努力が必要な難しい内容を29項目取り入れている(図13)。

しかし、当初は、進んで取り組むのは運動遊びが得意な幼児数名で、教師がそばで援助をするときだけ取り組んだり、チャレンジカードに興味を示さない幼児もいた。

遊戯室での活動を通して、運動遊びに消極的だった幼児も、抵抗なく体を動かすことを楽しむようになり、ほとんどの幼児が、運動遊びに意欲的になった。その影響から、戸外でも運動遊びに取り組むようになり、チャレンジカードにも挑戦するようになった。

また、これまで教師が誘っても、なかなか取り組もうとしなかった幼児が、「今日は赤色まで」「あの線のところまで」と、自分なりに目標を持って挑戦したり、できるまで集中して取り組む姿も見られるようになった。このように、友達と一緒に教え合ったり、競い合ったりしながら、クラス全員が達成項目数を増やした。

さらに、2人はチャレンジカードの全項目を達成することができた(図14)。

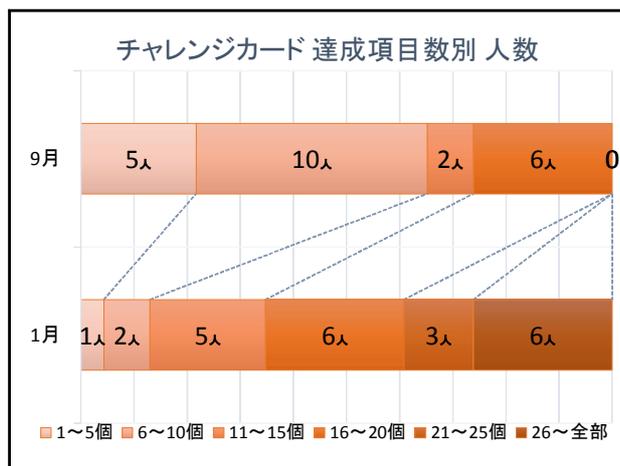


図14 チャレンジカード集計結果

遊戯室での運動遊びを通して、運動遊びが好きになり、進んで体を動かすようになることを目指した本研究の取り組みが、戸外での運動遊びにも好影響を及ぼしていることがわかった。

IX 研究の成果と課題

1 成果

- (1) 遊戯室を活用し、運動遊びを段階的に取り入れたことで、幼児が自分のペースで楽しみながら取り組み、運動遊びが好きになり、自分なりの目標を持って進んで体を動かすようになった。
- (2) 遊戯室の環境を工夫し、使用する遊具や遊び方も、環境構成図を作成したりして一緒に考えていったことで、幼児が見通しを持って意欲的に運動遊びに取り組むようになった。
- (3) 個の発達に応じた援助を行ったことで、運動遊びに消極的だった幼児も、抵抗なく取り組み、達成感や充実感を味わうことができた。
- (4) 幼児が基本的な動きを身につけたことで、できる喜びを味わい、運動遊びへの意欲がますます高まった。
- (5) 思いを伝えることが苦手だった幼児も、進んで発表できるようになるなど、少しずつできることが増えたことで、自信がついた。

2 課題

- (1) 誰もが楽しく取り組めるよう、個人差に応じた内容や援助を工夫していく。
- (2) 運動遊びの年間活動計画を作成し、室内や戸外でも年間を通して継続的に取り組んでいけるようにする。
- (3) 園生活の様々な場面で運動遊びを取り入れられるよう、教材研究を深めていく。

おわりに

本研究を通して、幼児期に多様な動きを経験し身につけることが、幼児の様々な発達に大きく影響してくることを学びました。また、楽しく遊びながらいろいろな動きを経験できるよう、環境や援助の工夫、教材研究も深めていくことができました。

今回、実践を進めながら、幼児の表情や言動から、楽しさや意欲の高まり、成長が感じられ、私自身も楽しみながら進めていくことができました。

さらに、実践からいくつかの課題も見えてきましたが、改善を加えながら年間を通して継続していくことで、更なる成果が期待できることも実感しました。

今後は、遊戯室に限らず、園庭や体育館、運動場、日々の保育の中などでも、運動遊びを取り入れていけるよう、活動の場も広げていきたいと思えます。

入所前研修から研究期間中、多くのご指導をいただきました仲西起實所長、山里崇係長、日高聡指導主事、ご指導、ご助言をいただきました幼稚園指導主事名嘉房枝先生をはじめ、浦添市教育委員会の諸先生方、内間幼稚園の友利愛子副園長へ深く感謝申し上げます。

最後に、この研究の機会をくださり、快く送り出してくださいました沢岬幼稚園の仲間公子園長をはじめ、いつも暖かく励まし、協力してくださった先生方、半年間共に支え合ってきた研究員の先生方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

【主な参考・引用文献】

- ・指導用スライド教材Ⅲ
運動能力の発達と「遊びの」大切さ ～運動遊びを通して育つもの～
東京都教育委員会 2012年
- ・0～5歳児の運動遊び指導百科 前橋 明 ひかりのくに株式会社 2004年
- ・幼児期運動指針ガイドブック ～毎日、楽しく体を動かすために～
文部科学省 幼児期運動指針策定委員会 2012年
- ・日本幼児体育学会認定 幼児体育指導員養成テキスト
幼児体育－理論と実践－〔初級〕 日本幼児体育学会 株式会社大学教育出版 2011年
- ・文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書
「幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造分析」
研究代表者 杉原隆 文部科学省 2002年
- ・幼稚園教育要領解説 文部科学省 フレーベル館 2008年